

年中児における G ボール運動遊びの実態

－ 保育内容の 5 領域から捉える－

田村元延, 板谷 厚*, 古屋朝映子**

I. 緒言

G ボールは、弾力性を有する大きなボールである (写真 1)。その使用用途は、1960 年代にスイスの理学療法士により神経系に障害のある子どもたちの治療道具のひとつとして活用されたことに端を発する。近年日本でも、スポーツ選手のコンディショニングやトレーニングをはじめフィットネスクラブなど様々な分野で活用の幅が広がっている。教育分野では 2008 年に小学校学習指導要領解説体育編 (文部科学省, 2008) の中で例示され、小学校体育の教具として活用され始めている。

小学校児童を対象とした G ボールに関する指導書 (池田・長谷川, 2010) では、臥位や座位姿勢で「のる」、「はずむ」、「ころがる」といった G ボールの特性を活かしたバランス運動やボールをころがす、バウンドさせるなどのボール操作の運動が紹介されている。先行研究において、座位姿勢で「はずむ」運動は、体幹筋群に刺激を与え児童の姿勢改善に一定の効果があると報告されている (長谷川ほか, 2006; 板谷ほか, 2007)。また、小学校中学年を対象に実践的な研究 (田村, 2014) も行われており、内省調査としての形成的授業評価 (高橋, 1994) において、楽しく主体的に活動する項目で高い評価が得られたと報告されている。このように G ボール運動は、不安定な環境で姿勢を調整することや用具を操作することなど、多様な運動を主体的に経験できることが期待される。

こうした背景から、この G ボールを幼児対象の運動遊び教材として活用していくことは、無藤 (2013) や幼児期運動指針 (2012) の中で述べられているように、様々な遊びの中で多様な動きを経験することが求められる幼児期に有用であると考えられる。

しかし、G ボールを保育現場で活用するために行われた研究は、小学校 3, 4 年生児童の活動を保育内容の 5 領域から分析した研究 (田村, 2014) のみであり、幼児を対象とした実践的な研究が行われていないのが現状である。そのため、今後 G ボールを保育現場で活用するには、十分に実践的な検討を重ねて行く必要があるといえる。さらに、保育では、遊びを通しての指導を中心として保育内容の 5 領域 (「健康」、「人間関係」、「環境」、「言葉」、及び「表現」) を総合的に達成することが求められる (文部科学省, 2008)。こうしたことを踏まえ、幼児は G ボールでどのように遊ぶのかといった実態を把握することに加え、その遊びについて保育内容の 5 領域が含まれているのかという観点からも検討を行う必要があると考える。

*北海道教育大学 **川村学園女子大学

そこで、本研究では、年中児を対象に G ボールを用いた自由遊びを実施し、幼児の G ボール遊びの実態調査を行うと共に、それらの遊びが保育内容の 5 領域を含んでいるかを検討することで、G ボールを保育の運動遊び教材として活用するための知見を得ることを目的とした。

II. 方法

1. 対象幼児

G 大学付属幼稚園年中クラスに所属する幼児 19 名（男児 7 名、女児 12 名）を対象とした。年齢、身長、及び体重の平均値については、表 1 に示す通りである。対象幼児はすべて、G ボールでの運動経験のない者であった。

表 1. 対象幼児の年齢、身長、体重の平均値

年中	年齢(歳)	身長(cm)	体重(kg)
n = 19	5.4±0.3 歳	108.2±9.0 cm	18.0±1.5 kg

2. 実践の手順及び安全管理

実践は、2014 年 2 月 27 日に G 大学付属幼稚園のプレイホールにて実施した。実践の手順を図 1 に示す。まず、G ボール指導経験者 1 名が安全に活動するための諸注意を行った。その内容は、表 2 に示す通りである。その後、G ボールの使用方法は伝えず G ボール（45cm）を 1 人 1 つ渡し、10 分の間、自由に遊んでもらった。活動中の安全管理は検者 1 名、補助者 1 名及び担任の先生の計 3 名で行った。「諸注意の禁止行為が起こっていないか」や「幼児が怪我を負うような危険な状況に陥っていないか」の面から危機管理を行った。活動の様子は、図 2 に示すようにステージ上にビデオカメラをセッティングし、写真 1 に示したアングルで映像を記録した。これらの活動は、園長に説明の上、同意を得た。

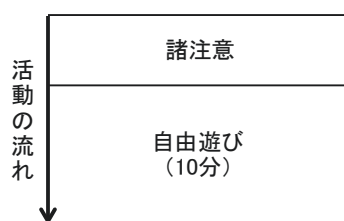


図 1. 実践の手順

表 2. 諸注意（禁止行為）

- | |
|--|
| <ol style="list-style-type: none"> 1. ボールの上には立たない 2. ボールを人に投げたり蹴ったりしてぶつけない 3. サッカー(ヘディング)はしない |
|--|



図 2. カメラの配置



写真 1. カメラ映像のアンクル

3. 分析方法

1) G ボール運動遊びの実態調査

年中児が G ボールでどのように遊んでいるのかについて遊びの実態を明らかにするために、G ボール遊びの抽出と分類を行った。その手順として、G ボールインストラクター資格を持つ者 1 名と指導経験のある者 1 名の計 2 名が、年中児の自由遊びの記録映像を基に各幼児の活動について観察した。G ボール遊びの抽出については、「G ボール上で実施する身体操作遊び」（以下、身体操作遊び）や「G ボールを操作する遊び」（以下、ボール操作遊び）の観点から事例的に抽出した。

その後、身体操作遊びについては、池田・長谷川（2010）の G ボールの指導書を参考に、ボールに「のる」、ボールで「はずむ」、ボールで「ころがる」といった G ボール運動特性の観点と臥位（伏臥位、仰臥位）、座位、膝立ちといった姿勢の観点から分類を行った。

ボール操作遊びについては、独自に「ボールの弾性を利用する操作遊び」「ボールのころがりを利用する操作遊び」「ボールの大きさを利用する操作遊び」から分類した。

また、1 人遊び及び集団遊びなどの活動形態やボールを何かに見立てることや言葉を発することなどの特徴的な遊びの事例についても調査を行った。

2) G ボール運動遊びの分析

G ボール遊びには、保育内容の 5 領域が含まれているのかを検討するために、自由遊びの実態調査で明らかになった年中児の G ボール遊びについて、幼稚園教育要領解説（文部科学省、2008）に示されている 5 領域（心身の健康に関する領域「健康」、人のかかわりに関する領域「人間関係」、身近な環境とのかかわりに関する領域「環境」、言葉の獲得に関する領域「言葉」、感性と表現に関する領域「表現」）から考察を行った。

Ⅲ. 結果

1. G ボール運動遊びの実態調査

1) 身体操作遊び

ボール上での遊びである身体操作遊びは、のる・伏臥位（写真 2）、のる・仰臥位（写

真3), のる・座位 (写真4), のる・座位・足挙げ (写真5), のる・座位・複数 (写真6), のる・膝立ち (写真7), はずむ・座位 (写真8), はずむ・座位・複数 (写真9), ころがる・伏臥位 (写真10), ころがる・伏臥位 (助走から) (写真11), ころがる・座位－仰臥位 (写真12) の11種類であった。その結果, 「のる」遊びが6種類と, 「はずむ」遊び (2種類), 「ころがる」遊び (3種類) に比べて多い傾向にあった。

また, 遊びの活動形態として, のる・座位・複数 (写真6), はずむ・座位・複数 (写真9) のように集団の遊びが2種類実施されていたが, 一人で行う遊びが多い傾向であった。

特徴的な遊びの事例については, のる・座位・複数 (写真6) の際にGボールを太鼓に見立て叩いて音を出して遊ぶ者や, はずむ・座位 (写真8) 遊びにおいて, 「きもちい」と言葉を発しながらボールではずむ者も見受けられた。

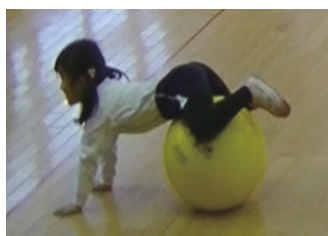


写真2. のる・伏臥位

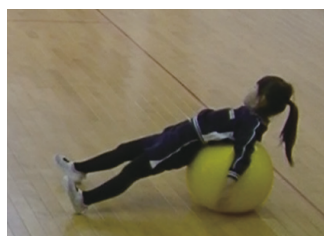


写真3. のる・仰臥位



写真4. のる・座位



写真5. のる・座位 (足挙げ)



写真6. のる・座位・複数



写真7. のる・膝立ち



写真8. はずむ・座位



写真9. はずむ・座位・複数



写真 10. ころがる・伏臥位



写真 11. ころがる・伏臥位（助走から）

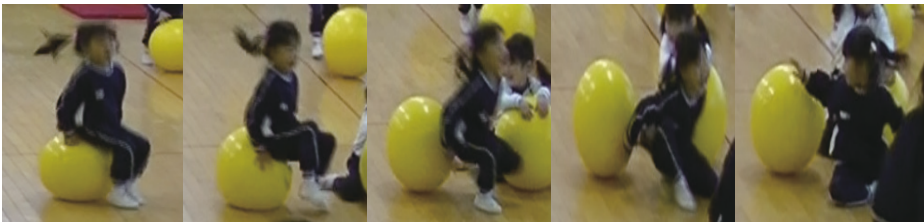


写真 12. ころがる・座位-仰臥位

2) ボール操作遊び

ボール操作遊びは、まりつき（写真13）、まりつき（移動しながら）（写真14）、大玉ころがし（写真15）、膝立ちで大玉ころがし（写真16）、ころがしたボールを追いかける（写真17）、座ってボールをころがす（写真18）、抱えて座る（写真19）、持って運ぶ（写真20）、雪だるま（写真21）、ボール投げ上げキャッチ（写真22）の10種類であった。傾向としては、まりつき（写真13）などの「ボールの弾性を利用する操作遊び」が3種類、大玉ころがし（写真15）などの「ボールのころがりを利用する操作遊び」が4種類、持って運ぶ（写真20）などの「ボールの大きさを利用する操作遊び」は、3種類であり、種類数に大きな違いはなかった。

遊びの活動形態においては、集団での遊びは雪だるま（写真21）のみで、主に一人で行う遊びが実施されていた。

特徴的な遊びの事例について、雪だるま（写真21）の例を挙げると、偶発的に他人のボールの上に自分のボールを置いたことがきっかけとなり、この遊びが始まった。するとすぐにこの遊びを見つけた年中児が、周りに集まり自分のボールを積み重ね始め集団遊びへと発展した。



写真 13. まりつき



写真 14. まりつき (移動しながら)

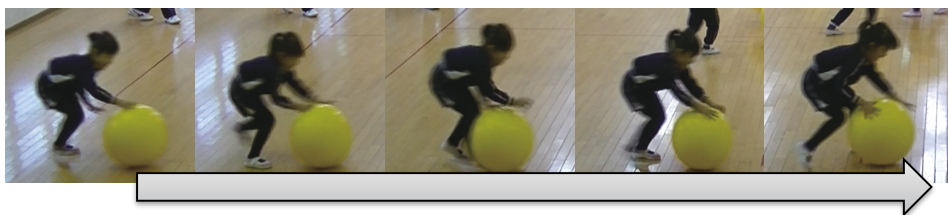


写真 15. 大玉ころがし

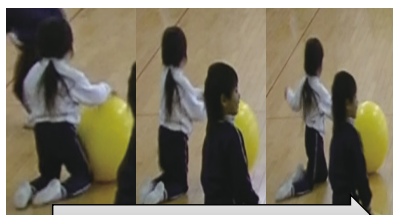


写真 16. 膝立ちで大玉ころがし



写真 17. ころがしたボールを追いかける



写真 18. 座ってボールをころがす



写真 19. 抱えて座る



写真 20. 持って運ぶ



写真 21. 雪だるま

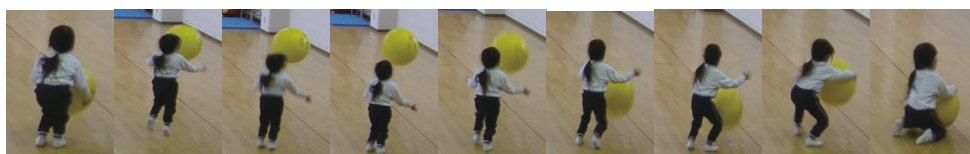


写真 22. ボール投げ上げキャッチ

IV. 考察

1. G ボール運動遊びの分析

G ボール遊びには、保育内容の 5 領域が含まれているのかを検討するために、自由遊びの実態調査で明らかになった年中児の遊びについて、保育内容の 5 領域（心身の健康に関する領域「健康」、人とのかかわりに関する領域「人間関係」、身近な環境とのかかわりに関する領域「環境」、言葉の獲得に関する領域「言葉」、感性と表現に関する領域「表現」）から考察を行った。

10 分間の自由遊びで抽出できた遊びの種類は、身体操作遊びが 11 種類、ボール操作遊びは 10 種類であった。これらの遊びは、特に遊び方に関する指導がなかったにも拘らず年中児がボールとかかわる中で生み出した遊びといえよう。この結果について、G ボールを 1 人

に1つ貸与し、自由に遊んでもらう環境を設定したことで、ボールと十分にかかわる時間を保証できたためと考える。このことは、「健康」領域において、「(2) いろいろな遊びの中で十分に体を動かす。」「(4) 様々な活動に親しみ、楽しんで取り組む。」ことや、「環境」領域において、「(2) 生活の中で、様々な物に触れ、その性質や仕組みに興味や関心をもつ。」「(7) 身近な物や遊具に興味をもってかかわり、考えたり、試したりして工夫して遊ぶ。」という内容に繋がると推察する。

また、活動中の安全面について、禁止行為を行う者や怪我を負う者はいなかった。このことから、本研究の環境設定において、概ね諸注意は守られ、危険な状況はなかったと考える。このように活動開始前にある程度の約束事を決めることは「(10) 危険な場所、危険な遊び方、災害時などの行動の仕方が分かり、安全に気を付けて行動する。」といった内容に繋がると推察する。

遊びの形態として、1人で行う遊びが多い傾向にあったが、集団での遊びは3種類(写真5, 8, 20)観察できた。このことは、「人間関係」領域において、「(8) 友達と楽しく活動する中で、共通の目的を見だし、工夫したり、協力したりなどする。」といった内容に繋がると思われる。

身体操作遊びにおいて、はずむ・座位(写真8)で遊んでいる際に、幼児が「きもちい」と声を発する事例が認められた。このことについて「言葉」領域において、「(2) したり、見たり、聞いたり、感じたり、考えたりなどしたことを自分なりに言葉で表現する。」「(8) いろいろな体験を通じてイメージや言葉を豊かにする。」といった内容に関連すると推察する。さらにのる・座位・複数(写真6)の遊びの際、太鼓に見立てて遊ぶ様子が認められたことからボールをたたくことで発生する音という観点に気づき遊びを展開する幼児もいた。このことは、「表現」領域において、「(4) 感じたこと、考えたことなど音や動きなどで表現したり、自由にかいたり、つくったりなどする。」「(5) いろいろな素材に親しみ、工夫して遊ぶ。」「(8) 自分のイメージを動きや言葉などで表現したり、演じて遊んだりするなどの楽しさを味わう。」といった内容に関連するものと思われる。

V. 結論

年中児は10分間の自由遊びで、身体操作遊び11種類、ボール操作遊び10種類を実施していたことが明らかになった。これらの遊びについて、保育内容の5領域の観点から検討を行った結果、「健康」「人間関係」「環境」「言葉」「表現」の5領域から捉えることができた。このことから今後、Gボールを保育の運動遊び教材として活用していくことは可能であると考える。

VI. 今後の課題

今後、保育現場の先生が活用していくためには安全面を考慮した上で指導方法を検討していく必要があると考える。そのためには、本研究で明らかになった遊びが10分間で、どの程度行なわれているのかについて遊びの時間や遊びの変化といった観点からより詳細に捉えていくことが必要である。

さらに、活動中における G ボールからの落下、転倒の有無やその状況に関する調査を行い、実践者の立場から幼児が安全に活動できる環境づくりの検討を行っていくことが課題である。

謝辞

本研究は、平成 26 年度日本体操学会公募研究プロジェクトによる助成を受けたものである。

参考・引用文献

- 長谷川聖修, 本谷聡, 池田陽介ほか (2006), G ボールを用いた児童の姿勢づくりの試みー座位バウンド運動による即時効果に着目してー. スポーツコーチング研究, 第 5 巻 (第 1 号): pp.13-21
- 池田延行, 長谷川聖修 (2010), ちゃれん G ボール. 明治図書出版
- 板谷厚, 沖田祐蔵, 檜皮貴子ほか (2007), 小学生における G ボールを用いた座位バウンド運動中の体幹筋群の筋電図: 習熟された座位バウンドの事例から. スポーツ方法学研究, 第 21 巻 (第 1 号): pp.55-58
- 文部科学省 (2008), 幼稚園教育要領解説. フレーベル館: pp.23
- 文部科学省 (2008), 小学校学習指導要領解説体育編. 東洋館出版社: pp.42
- 文部科学省 (2012), 幼児期運動指針. www.mext.go.jp/a_menu/sports/undousisin/1319771.htm
- 無藤隆 (2013), 幼児教育のデザイン 保育の生態学. 東京大学出版会: pp.72-90
- 高橋健夫, 長谷川悦示, 刈谷三郎 (1994), 体育授業の「形成的評価法」作成の試み: 子どもの授業評価の構造に着目して. 体育学研究 39: pp.29-37
- 田村元延, 古屋朝映子, 高橋靖彦ほか (2014), 小学校中学年を対象とした「体づくり運動」教材の検討ー G ボールを用いた運動指導に着目してー. 体操研究第 11 巻: pp.10-19
- 田村元延 (2014), 幼児の運動あそび教材に関する G ボール活用法ー小学校児童の G ボール活動を保育内容の 5 領域から捉えるー. 常葉大学短期大学部紀要第 45 号: pp.217-224